



## アンチスティグマ：当事者活動を中心に

コーディネーター 秋山 剛

精神疾患に対するスティグマが存在すると、本人や家族の就職、結婚、交友関係などに、差別的な不利が生じる。精神科の治療施設自体が「おぼけ屋敷」のように思われることもあり、「精神科の患者と会ってはおかしくありませんか」と質問される。地道な治療努力が成功しても、一般に知られることはなく、治療への支払いやあるべき基準について理解が得られない。精神科の患者が起こした事件がセンセーショナルに報道されれば、スティグマがさらに強まる。

日本精神神経学会が、1993年に全国精神障害者家族連合会から「精神分裂病の呼称を変更してほしい」という求めを受け、2002年の総会で、「統合失調症」に呼称変更したことは、先駆的なアンチスティグマ活動として注目されており、ICD-11の作成過程でも、Schizophreniaの呼称を変更するべきか、議論されている。

本シンポジウムでは、日本精神神経学会のアンチスティグマ活動をさらに進めるために、専門家、当事者、メディアの方からの発表をいただいた。

藍野大学の高橋清久先生には、2002年に厚生労働省がまとめた報告書「こころのバリアフリー宣言 精神疾患を正しく理解し、新しい一歩を踏み出すための指針」について、報告書が出された背景、普及啓発検討会が組織された経緯、報告書

の内容、2004年に厚労省が示した精神保健医療福祉の改革のビジョンとの関連について、ご教示いただいた。また、2003年に出された日本学術会議の報告書「こころのバリアフリーを目指して——精神疾患・精神障害の正しい知識の普及のために」の作成経緯や内容、これからのアンチスティグマ活動が向かうべき方向性についてのご示唆についてもお話をいただいた。

長崎大学の中根秀之先生には、日本とオーストラリアの間のスティグマに関する国際調査研究についてお話をいただいた。日本とオーストラリアの双方において、うつ病よりも統合失調症に対するスティグマが強いが、日本の方が、個人的体験に関するスティグマなどネガティブな反応が強いのではないかといった、非常に興味深い結果を教えてくださいました。

毎日新聞の原昌平さんには、メディア報道に関する問題点、メディアが対応しようとしている方向性について、お話をいただいた。原さんは、事件報道においてスティグマを強めないための活動のほか、当事者体験を、メディアで広く伝えるための活動も行っておられる。スティグマは、社会一般の中に存在するものであり、これを改善していくことは、アンチスティグマ活動には、欠くことができない。メディア活動との連携についても

考えさせられるお話であった。

スピーカーズ・ビューロー岡山の吉澤毅さん、中山芳樹さんからは、ご自分の発病や治療が非常につらかったという体験、スピーカーズ・ビューローとの出会い、親睦会や研修会などによる仲間同士のつながりや相互の助け合い、病院や地域にいる仲間への声の代弁、講演活動を通して精神障害に対する認識が変わりつつあるという確かな手ごたえ、などについて、お話をいただいた。精神疾患の体験の中から将来の希望をつかんでいこうとする当事者活動のお話は、私達のところに深くしみいるものであった。

クラブハウスはばたきの澤田優美子さんには、

クラブハウスの活動について、手際よくまとめたご説明をいただいた。澤田さんは、当事者の活動について、広く講演活動を行っておられ、こういった活動について、数々の受賞をしておられる。また、病者としての体験をさらに活かすために、精神医療従事者の資格取得も目指しておられる。お話の中では、精神科医に対するねぎらいの言葉も頂戴した。病気を介在として、二つの岸でむかいあっている病者と従事者に架け橋をつないでいただくお話であった。

今回のシンポジウムをきっかけに、日本精神神経学会のアンチスティグマ活動を、さらに発展させていきたいと考えている。